

どくだみ及びよもぎの栽培法							
〔要約〕 中山間地の地域特産物としてどくだみ及びよもぎの定着化を図るため、目標収量をどくだみでは7～8 t、よもぎでは2.5～3 tとした栽培法を確立した。							
八女分場・中山間地作物研究室					連絡先	0943-42-0292	
部会名	園芸	専門	栽培	対象	野草類	分類	普及

〔背景・ねらい〕

どくだみ及びよもぎの利用は、健康志向の高まりとともに盛んになっているが、大部分は山野からの採集に頼っているのが現状である。

そのため、中山間地の圃場条件、労働条件及び加工施設の利用条件を考慮し、新規導入作物としてどくだみ、よもぎを選定し、地域特産物として生産の安定化と経済作物としての基盤を確立するため、どくだみ及びよもぎの栽培実用化の基準を作成する。

〔成果の内容・特徴〕

- ①野生植物であるどくだみ及びよもぎの高品質・多収を得るための栽植方法、肥培管理法並びに収穫時期等の栽培条件を明らかにし（データ省略）、目標収量（生葉）を、どくだみでは6月及び9月の年2回収穫で10 a当たり6～7 t、よもぎでは5～9月の年4回収穫で2.5～3 t確保するための、それぞれの栽培基準を策定した（表1、2）。
- ②両植物とも多年生であり、植え付け初年目の収穫は行わず、2年目以降から収穫するので、定植以外の項目は2年目以降の栽培管理を示した（表1、2）。

〔成果の活用面・留意点〕

- ①どくだみ及びよもぎの栽培基準の作成に利用できる。
- ②どくだみ、よもぎの病虫害及び雑草防除は、耕種的防除や機械防除で行う。

[具体的データ]

表1 どくだみ栽培法（目標収量t/10a：6月中旬＝6～7、9月下旬＝0.8～1.2）

項目	時期	方法
定植 (初年度のみ)	3月～6月	畦幅100～120cm、畦高10cmの畦を作り、10～20cmに切断した地下茎を3～4cmの深さに㎡当り15～20本定植する。定植後、乾燥防止と雑草の発生を抑制するため、10a当り300kgの切断稲藁で被覆する。
雑草防除	3月～11月	除草は手取り除草及び稲藁被覆による耕種的防除を行う。2年目以降はどくだみの繁茂によって夏雑草は殆ど問題とならない。
施肥	2月、4月	施肥は2月及び4月にN:P:Kそれぞれ7kg/10a施肥する。
病虫害防除	-----	どくだみを加害する病虫害は現時点まで明らかでない。
収穫	6月 (開花期) 9月	どくだみの有効成分であるクエルシトリンの含有量は開花期が最も高く、開花期である6月中旬に地上部を収穫する（定植2年目以降）。再生茎は9月下旬に収穫する。

表2 よもぎ栽培法（目標収量t/10a：5～9月、年4回収穫＝2.5～3）

項目	時期	方法
定植 (初年度のみ)	4月～9月	畦幅100cm～120cm、畦高10cmに作畦し、地上部を10cm程度残して調整した山採り苗を㎡当り10本定植する。定植後稲藁で被覆し、乾燥と雑草の発生を防止する。
雑草防除	4月～9月	手取り除草及び稲藁被覆による耕種的防除とする。
施肥	2月～7月	茎長が10cm程度に生長した段階で若芽を収穫する場合、施肥はN:P:K成分量で15kg/10aとし、2、4、6、7月の4回に分施する。
病虫害防除	-----	よもぎを加害する病虫害では、特に害虫が問題となり6月中旬以降に葉を食害する虫が多発する。しかし、よもぎに登録された農薬は無く、また利用場面を考慮すると無農薬が望ましい。このため、収穫間隔を4～5週間程度で行えば被害をかなり軽減できる。
収穫	5月～9月	4～6週間間隔（高温期は短い）で草丈が10cm程度に生長したよもぎの先端部分（約5cm）を茶用の手挟（収穫袋付き）を用いて収穫する。

[その他]

研究課題名：地域資源を活用した中山間地作物の安定栽培技術の確立
 予算区分：国庫（中山間）
 研究期間：平成5年度（平成2～5年）
 研究担当者：大賀康之、執行明久
 発表論文等：平成2～5年度 福岡県農業総合試験場八女分場 試験成績書